

後

篇

礙へられぬ光のなかに住みながらしらぬは己がまよひなりけり

唯己が知見のいかが神聖の鏡に向ひ照り返へし見よ

正善の神の聖旨にかなはざる業は必ず亡ぶなりけり

邪悪を捨て、正善撰びとり国を建てます弥陀の本願

子を愛す恩寵の靈気なかりせば靈の華はいかで開けん

安心と闇示

宗教心には安心あんしんの決定が最も大事であります。若し安心にして誤らんか万行徒らに施す、即ち功なきに至ります。されば宗教は靈的に活ける靈界の教師に就て教を請まげざれば眞実の信仰が靈的に復活することができぬ。夫れに安心の決定も大事である。

宗教の安心は催眠術の闇示と同じ。世のかよはかな安心は現在を靈的に活す功用がない。念仏すれば現世にはかわつたことなけれども死後に必らず浄土に生ずと、只念仏は未来往生の爲であると。凭る安心を以ては迎も現在即今靈的に復活することはできぬ。例へば催眠術を施して術者が被術者に対して汝が病氣若くは性癖が今はとても治せぬけれども遠き将来には治るとの闇示を強く与へたならば迎も速座に病に効能はない。夫と同じくいかに熱心な信仰を以ても未来死後の往生の爲めと云ふ安心の下には現在に心靈復活して靈的に活することはできぬ。世に善知識と云は信仰を以て心靈を治す良師を云ふ。自から靈に活る知識は自己の胸中に輝く如来の靈的生命が常恒に心中に活躍しつゝあり、故

に之を以て以心伝的に感應せしむ。其が為に人に安心を勉むるに、現在より如来は靈的に活すことを示す。

念仏は是衆生を靈に復活せしむる如来の靈力なり。衆生念仏すれば如来もまた衆生を憶念し給ふ。如来の靈力を被むるが故に我等の靈は活かさるゝなり。

我らは赤子である。赤子は親の慈悲の乳に依らざれば育たぬ。我らが靈は如来の靈乳に養はれて育つ。

宗教心の安心と云ふ心の安置^{すまひつかた}方に、現在から念仏して靈に活きんとこの安心が大事である。靈に活きることなき安心を教ゆる教師は眞の活ける善知識に非ず。

家庭に於て子女を教育するに、此子は意気地なしであると何を為すにも必らず意気地なしと云て叱りて計りゐると、夫が其子女の精神に暗示となりて遂には意気地なしと化してしまふと云ふ。信仰も安心の据え置き方が暗示であるから、安心を未来の往生と暗示するは人を精神的に復活すべきことは得て望むべからずである。もし現在より心靈が復活せんと欲せば、如来の光明は靈を活すの靈力なり、一心に念仏すれば必らず靈的生命となり得らるゝ、との安心は必らず人の心靈を現実に活す力な

り。かくの如きの因縁を以て安心は闡示として人に死活の動機を与ふ故に頗る大事なりとす。

人格的の本尊

光明主義の本尊は永遠に活ける弥陀尊なり。理想最高の本尊は絶対的宇宙の中心最高処に蔽臨し給ふ独一不二の無上尊にして、一切諸仏方法を統攝し給ふ最尊者にして、一切万行の帰趣する処の靈体なり。如来は唯一不二にして而も一切の信者の為に各自の信仰に應じて靈応の身を分て其人の前に在ます、衆生の心想の中に住し給ふ。衆生の心相各々不同の故に感応する処の身色相好もまた不同。但帰する処は其人の信仰の本尊と為りて、一切の処一切の時に於て、其人の心意を開攝し指導し益々向上せしむる活ける本尊なり。

若し小乗教に於ては五分法身を各自の本尊とす。

釈尊御入滅に臨み給ひて、若我世に住すこと一劫すとも会ふものは亦当に離るべし。会ふて離れざること終に得べからず。自利々人の法皆具足せり、若我久しく住すとも更らに益する所なけん。応さ

に度すべき者は若は天上人間皆悉く已に度しぬ、未だ度せざる者には皆亦已に得度の因縁を作りぬ。自今已後我諸の弟子展転して之を行ぜば、則是如来の法身常に在して滅せざるなり。

如来の法身常住不滅の法身を之を、小乗教にては五分法身また波羅提木叉と名づく。聞く所によれば、印度の小乗教にては得度式の作法に依りて五分法身を授け、そが其得度者の頭脳の中の本尊として、斯の戒体が発得して精神生活を支配するに至ると。

今大乘教にては教祖釈尊已に初めて正覚を成じ已るや、梵網戒三昧に入つて本仏盧舍那カシヤナを本身として千と百億との釈迦は各無数の眷屬と共に本仏を圍繞して本仏より道德の根本たる戒法を聞くと。然れば即ち人仏釈尊の精神界には常に本仏盧舍那が道德律の本尊として常に嚴臨し給ふこと必せり。盧舍那仏即ち弥陀尊なり。已に信心獲得したる上にはナムアマミダ仏が実現し來たる。

ナムとは我等衆生の心の全心全幅を獻げて帰命信頼することなり。阿弥陀仏は我等が信念の前に大威神大智慧大慈悲を以て常恒に嚴臨し給ふ靈体なり。

ナムアマミダ仏と申す時、ナムの信念の前に弥陀世尊嚴臨し給ふ。

至誠心の念仏の前には弥陀現在し給ふ。なれども衆生の信心の鏡曇る故に現前せざるなり。導師曰

く、弥陀身心遍_ニ法界_一、映現_ニ衆生心_中。

宗 教 心

人は宇宙の中心なる独尊の实在を信じて真実に尊敬し信頼するときは自己の中心靈性が開發す。自己の靈性は自己の尊き性である。尊き性が開顯する故に大なる尊格を信認することが得らる。

自分の靈性尊き性を以て客体の尊き靈体が信じられる。大小異なれども其性質同き故に。見よ、動物の如き卑劣なる性を以ては大なる尊体を信認することはできぬ。其性質が異にして感應すべき理がない。鉞物の中金剛石の如き貴金屬にして始めて日光が反射する。瓦礫には日光反映せぬ。動物的の性には如来の靈体は反映せぬ。性格に於て異なるが故に。故に動物には未だ高等なる宗教心は顯動せぬ。人には如来光明を反映すべき靈的宝石の材宝を蔵して居る。然れども此宝石を琢磨するに非らざれば如来の光明反映せぬ。金剛石の如き堅固なる質の物は灰や砂を以て琢磨することはできぬ。夫と同じく人の最高等なる宗教心即ち弥陀の日光を反映すべき金剛の信心は迷信やまた野狐禪的やまた只

實質なき言語の説法を聞く位で發揮すべき靈性ではない。寶石を磨くには只金剛砂を用ゆる如く、人の靈的寶石を磨くには一心念仏三昧にあらざれば琢磨の功が顯はれぬ。

只念仏三昧即ち弥陀の靈力との最親密なる仏心衆生心との合致すべき三昧のみあつて靈性を磨くべし。若し靈性顯示する時は弥陀の日光反映す。此三昧に依つて磨かれ發揮する宗教心、此尊貴なる靈性に、弥陀の日光反映する時は是靈的人格、宗教界の偉人なり。眞実に活ける宗教家なり。只文字言語のみの僧侶居士などの窺ひ測るべき処にあらず。

人の靈性は、精神中の奥底に伏在す。金剛石は琢磨することは容易に非らず。其容易ならざる処にまた貴重なる価値あり。念仏三昧の至誠心あれば何人も成熟す。三昧の琢磨の功顯はれたる金剛石。常に弥陀の日光を映写する人の頭上には常に靈的光明反射しつゝあり。

觀音頂上の彌陀

念仏者の信心を代表する觀音の頭上に彌陀尊を安置す。善く琢磨せる光に弥陀の日光反映して其が

弥陀の靈に充さるゝ觀音の宗教心なり。頭上に弥陀を頂けるは是觀音の知見開示して弥陀を知見し弥陀の聖意に悟入せる態の表明なり。頭上に然る如く觀音の胸臆には、即ち内容的に於て弥陀と親密なる融合、入我々入、この神秘的の奥妙に於ては言語の及ばざる処。西藏仏教に異性相抱の絵画を以て神秘的感情の内容を表明す。即ち神人の靈的融合の心象を標現したるものなり。

觀音の胸に輝ける瓔珞

觀世音は金銀摩尼真珠るり寶石等あらゆる珍宝を以て瓔珞と為して相好あひがう円満の身を莊嚴しょうごんす。是何の表明ぞや。是觀音は一切の菩薩の万徳を代表する靈的人格として我等弥陀法王を信念する人の人格を即ち品性を造るべきことを表はし給へり。諸の瓔珞の宝珠は人格莊嚴の万徳なれば是菩薩の願行を表はす。若し念仏して弥陀の光明に靈化して人格革新し弥陀の聖意を我意とし弥陀の聖徳を體現するに至れば是觀音の分身なり。たとひ完全なる觀音の万徳を體現するに至らざるも一分弥陀に靈化せらるれば一分の徳が備はりて一分の體現が得らる。

法喜禪悅

法喜は法悦とも云ふ。是は已に信仰の生活に入りし人の感情的の心理状態である。人は心靈開發する時は心機一変す。

未開の人の心は生理的の機制に閉塞せられて自然と不靈福の状態である。未開の心理は恰も開くべき花が未だ開けざる時の如くに、苦慮するの因もなきに苦慮し、恰も味藤素朴の人が貴人に対する時は、俗に云ふハニカムと云ふ如くに、大なる如来の中に在りながら信心は開發せざるはこれ常人の自然なり。人は靈性具有すれ共開發顕動せざる間は、例へば金剛石の未だ琢磨せざる時の如くに不靈福の状態である。

若し人一度念仏三昧の功果として心靈が融化する時は心情の状態が平和に心寛くびろく体胖たふかに、狭き一室に閉塞せられたる人が広き天地に開かれたる如く、靈的気分が内に充ち如来大慈の光明の裡にある状態。恰も陽春和氣に花開き麗はしきを呈し馥郁として香を流すが如く、敏喜内に満ち靈感極まりな

し。此靈的気分を法悦と云ふ。常に平和にこの如来大慈光明裡に生息する心は歛天喜地常盤とよひの春永へに靈感極りなきを感ず。已に開發する時は心情が靈福態となりし人なれば、此心情を以て万物に待せば万物皆悦を以て我を迎へ、鳥歌ひ花舞ひ、同じ花月を眺むるにも自己の心の靈妙態と為りたれば、花も開く希有の色、月も真如の光を放ち、万境悉く靈象ならざるはなし。

若し爰に至つて釈尊が自己の靈的經驗より証明なされた經、例へば阿弥陀經に彼仏の国土には常に天樂てんらくを作す、黄金を地と為し、昼夜六時に曼荼羅華まんだらけを雨らす、等の文々句々悉く自己の靈が共鳴して浄土の樂地自己の心に実感し顯現す。故に自己の靈性活動し來つて浄土の經典を播く時は、經の文々句々、悉く活きたる浄土の莊嚴が自己心眼の前に實現し來りて、昔数千年前の説法は我眼前の靈境界となる。

亦人は例へば人の非常に歛樂を感ずべき境に臨んでも内心に悶ゆる時は歛樂を感ぜざる如き、經に謂ゆる昏朦閉塞して愚惑に覆はれ、悪氣窳冥にして妄に事を興すとは、是朦昧なる人の心理状態である。

經に、無量壽仏が七宝の講堂に於て大衆の為に法を宣べ給ふ時道教を宣べ妙法を宣暢し歛喜せざる

なし。心解得道し歎喜無量。即時に四方より自然に風起て普く宝樹を吹いて五音声を出し、無量の妙花を雨して風に随つて周徧す。自然の供養是の如く絶へず、一切の諸天皆天上百千華香万種伎楽を齎して其仏及び諸の菩薩声聞大衆に供養す、普ねく花香を散し、諸の音楽を奏し、前後に来往して更々相開避す、斯の時に當つて熾怡快樂勝へて言ふべからずと。

斯の如きの文字も若し能く自己の靈性開け来つて看る時は決して形容の詞にあらずして全く高等なる宗教心の実感すべき靈境なり。歎喜光が自己の心情中に融化する時は釈尊実験の説の如きは実に唯共鳴するの外は非らずして、自己の心靈に現前する機会ならざるはない。また唯弥陀心靈実験の談を以て自己の靈性の感鳴するのみに非ず、宇宙一切万有悉く如来の法身の顯現にして何かは法悦の感を動す機会ならざるはなし。

鄙にも都にも、例へば人が万物見る物聞く物として樂からざるはなしと云ふ樂しみ、人間の造りたる大都會の中に演出する快樂も、またすべて都會の誤樂は多くは人工的である。廓大なる建物の中に眼を眩暈し身を悦ばしむるものを以て人に歎樂を与ふ。然るに田舎山村僻邑の地に至れば山に水に自然の美天然の風致また人工の及ばざる趣味あり此中に亦自然の樂あり。然るが如く浄土の一切五妙境

界の美観は仏智所成の顕現にして其美微妙奇麗なる亦言思に絶したり。然れども娑婆の自然の風致は是法身の顕現にして、一切万物の中に自然の美をなし風趣を供ふなり。是恰も田舎の如く若し夫れ自己の心靈開發し弥陀の靈に醒むる時は、娑婆は娑婆としての法悦を感じべき万境なり、浄土は浄土として五妙境界の微妙莊嚴ならざるなし。これらはすべて法悦の状態とす。

禅悦は三昧樂とも云ふ。心静なる定中に深く内的靈感の感情に於て感ずる心状。定中の微妙なる喜樂を感じ、之を禅悦といふ。

こ　　才　　ヤ

宗教心即ち信仰を立てんには先づ第一に私共を撰取て救ひ下さる所の大慈父、即ち一りの大ミオヤの實在を信じて之に帰命信賴する処に宗教心は成立つものである。一切の衆生を悉く我子としてすべてを平等の慈悲を以て無条件に撰めて救ひ下さる処の大ミオヤの在ますことを信するのである。

我等が教祖釈迦牟尼が此世に出ましたのも、若し宗教的に云はば、宇宙に唯一の大ミオヤの實在を

教へて、すべての衆生をしてミオヤの聖意に隨はしめて、其御子たる自己であることを信じて、ミオヤの全きが如くに全き人に為さんが為に教へを垂れ給ふたのである。

されば釈尊はたとひ人類と同じく人の身を以て此世に出で給ひしかども、其御心霊の本体は法身常住の無量寿如来に在します。故に法華經に釈尊は御自分の御本体は宇宙の大ミオヤに在ます故にかやうに仰せられてござる、「三界は我有にて其中に衆生は悉皆な我子である」と。三界とは欲界、色界、無色界、云換ふれば地界と天界と空界とにて即ち宇宙全体を指したものに於て此中の生として活けるものは悉く皆吾子であると仰せなされた。

仏教は一面は哲學的にて一方よりは宗教的である。

一の大ミオヤを、哲學としては真如とか又法性とか第一義諦などの種々の名を以て号けてをるけれども、宗教としては宇宙全体を真に活ける尊きものと信ずるが故に、法身とかまた如来と云ふ名を以て大ミオヤを表明してをる。我等が真実に活ける宗教心を以て観るときは宇宙に最も尊き唯一の大ミオヤの实在を信ぜざるを得ぬ。唯一の大ミオヤに在ますけれども如来は三身に分れて在ます。ミオヤの三身の義を讀者は能く會解し給へ。三身とは一に法身、二に報身、三に応身であります。

法身とは毘盧遮那、即ち徧一切処と稱へて宇宙全体を普く一の活ける如来としてビルシヤナ如来と号けます。同じく法身と云ふも哲學的の教では法身とは只理法身、智法身杯と云て宇宙に存在する処の理法であると説てをる。宗教的に法身を教へてをるのは真言のビルシヤナは宇宙全体の地水火風空の物質の方面は是ビルシヤナの身体なので、宇宙に徧満する心を識大と申し、物質と心質とを合してビルシヤナで、即ち宇宙全体をソツクリ此まゝ活ける法身仏と仰いでをるのである。

法身仏は何処に在ますと云はゞ宇宙全体を其まゝ法身と号けたのである。

楞嚴經には、如来藏妙真如の性とは是天地万物の本体なので、一切の物質も、また人の眼の見ゆる耳の聴ゆるを始としてすべての人の心の作用も、また外の色も声も香も味も其本は宇宙全一の真如の性の作用である。之を宗教的に云はば法身の大ミオヤと名づく。して見れば私共の此形骸も心も大本はみな法身から受けたる物である。故に法身は天地万物の大ミオヤに在ます。

報身としては私共衆生の心を智慧と慈悲の光明を以て摂取靈化し給ふミオヤである。報身を盧遮那如来と稱して、訳すれば淨満また光明遍照と云ふ。即ち、アミダ如来が智慧と慈悲との光明を以て衆生の心霊を開きて清き善き人と為らしめて下さるミオヤである。

宗教の客体としてはこの報身光明遍照の如来が最も大事なので、此のミオヤの光明を被むりて私共が法身より受けたる心、心は喩へば鶏の卵の如くにて、之を仏性と云ふ。人々仏性の卵は有て居るけれども卵をあたゝめて孵化するやうに、私共の心を報身如来は光明の中に撰めて麗はしき信仰心を復活させて下さるのが報身仏と申します。經に無量寿如来の威神光明最尊第一にして諸仏の光明も及ぶこと能はずとして一切諸仏の本仏として尊き処の如来である。此如来に無量光等の十二の光明の名が在して、此光明こそ一切衆生を救ひて全き人として下さる御働きを有つて在ますのである。

応身としては報身なる浄界より身を分けて此世界の人類に応同して人間の身を以て衆生教化の爲めに此世に出給ひし教祖釈尊を応身と申します。たとひ報身如来なる光明遍照の尊き如来は太陽の光明の如くに衆生の心を照し給ふ如来在ますとも、若し応身の釈迦如来として世に御出ましくは衆生は教はることが出来ぬ。

故に法身としては天地万物の大ミオヤにて私共の体と心とのすべての大本なので、報身としては私共の法身から受けたる靈性の心をたすけて御子の徳を顕はして下さる御働きのミオヤにて、応身として教祖釈尊、即報身如来の光明に救はるゝ様に教の爲に此世に出ましたのである。故に此三身一つ欠

くも私共はたすからぬのであります。故に一の大ミオヤなれども三つに分つと、法身を本の大ミオヤとし報身を光明摂化のミオヤにて応身の釈尊は教へのミオヤであります。此の三身は本一体の大ミオヤであります。

法身の實在につきては若し哲学的に云ば、天地万物の大は天体の星宿の循環の秩序整然たるを見るもまた万物に条理あり秩序あるを見るも、此万物の天則秩序の統一的存在なくてはならぬ。万物の法則の本体を宗教的に云はゞ大ミオヤとす。

また報身は信仰する人の心を靈化する働きを有て在ます。摂取光明の如来の在ますことは、釈迦如来を始め古今の宗教界の偉人らの精神の、宗教的信念の最も聖き尊とき光明を放つ如きの心を成じたるは、宇宙には信仰する人の心を靈化する神尊の實在者が存在するが故なり。

例へば太陽の光に稲の実を成熟せしむる働きが存することは、目には見へねども全く太陽の光熱によつて稲米の果は成熟するものである如く、如来の光明は人の精神を聖靈的に成熟せしむる働きを有てをる。故に古今の宗教的偉人等は皆光明如来の光明を被むりて聖き信仰心が成熟なされたのである。故に大ミオオの光明、人の精神を靈化し給ふ力の存在することは、古今の偉人の心に結びたる果

を以て証することができる。

実は宗教は理論よりは実地である。何人も至誠専心に如来を憶念する時は必らず自己の精神が如来の光明に靈化せられて生れ更つて実に光明赫々たる心の生活することが得られる。是実は自己の精神に於て証明すること確かである。

仏子の自覺

仏教では一切衆生悉有仏性とて何人にも仏性と云ふ最も聖なる如来の御子たる性を具てをる。故に我共は仏の子たると共に人の子である。人間には両性を具してをる。人の子としては有ゆる肉欲我欲の闇黒方面を有てをる。人は動物である故に動物的の欲を持って動物欲を恣にせんとする欲を持つてをる。他の動物のやうに本能的に犬は犬、馬は馬の本能のやうに質直ならばまだしも、人間は智慧が発達しておる故に智慧までも悪用して動物欲の眼の欲耳の欲また色食の慾を逞うせんとしたならば実に狡猾なる最も悪き動物である。然れども人には奥底に伏能しておる靈性と云ふ本来仏の御子たる靈的

性能を具しておる。之を開発してそれが働けるやうになれば人は最も靈的に最も麗はしく最も清き精神生活を為し得らるゝなり。

仏教の宗とする処は人々本具の仏性を開きてミオヤの光明の中にミオヤの聖意に契ふ人として真に価値ある意義ある生活に入らしめんが為めに仏は世に出給ひしなり。

人は人の子たると共に如来の御子であることの自覚に入らしめんが為めに、仏は世に教を垂れ給ふた。法華経に、一切衆生は悉く我子と仰せられ、また方便品に、諸仏如来は衆生をして仏の知見を開示して仏の正道に悟入せしめんが為めに出世し給ふと。意は人々本具の仏性を開きて仏の御子の徳を示さんが為にと。

また梵網経には人々が仏の御子であることを自覚せしめんが為めに大乘戒を授く、衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る位大覚に同じおぼはぬれば真に是れ諸仏の子なりと。意は自己に仏の性あることを正しく自覚した時が真に是諸仏の聖子の自覚である。

若し唯人間は人間の子たるのみにして仏の御子の性徳を具有せぬものなれば、仏の教化を受けて如来の光明に攝取せられて光明中の生活に入ることができぬ。故にそこが大乘教の有りがたき処、何人

も皆仏の御子なれば如来の光明に摂化せられ仏性開發して我は是仏子なりとの自覚がされる。また人間の子である本能も靈化する。こう成つて見れば、人間の本能の欲も、靈性の光りに照らされてよく自己を改造し鍛練する時は本能も純化する時は高等なる人間としての働を為す。

人間の精神の奥底には無尽の性徳を具有してをる。何人も自分で自分の奥を究め底をたゞきて完全に發展させることは容易でない。人の奥に有する靈性は無尽蔵を有して之を發展すべき機会を得て開發する。

先に大ミオヤに三身在ますと宣べた。然れば私共衆生は法身から受けたる靈性を有つてをるけれども、即ち先に云た如く仏性は具有^{もつ}てをるも鶏の卵の如く之を孵化して鶏とならざれば鶏として活用ができぬ。吾人が御子の自覚をせんには必らず大ミオヤの光明に摂化せられねばならぬ。是宗教の必要ある所以である。然らばいかにせば私共の麗しき心は卵の孵化するやうに靈き心が開發するとなれば、即ち一心にミオヤの聖名を称へて恩寵の光明に摂化せられんことを要す。之を經に、ミオヤの光明は普く十方一切を照し給ふも唯念仏の衆生を光明の中に攝取して捨て給はずと。専らミオヤの聖名を口に称へ、意に専らミオヤを憶念して、不斷に絶ざれば、如来の大慈悲の光に融化せられて漸々に

信仰心が熟して、喩へば卵の中味が雛の形つくりてつゝに開裂して雛と為る如くに、心靈が喚起し来れば我は是仏の御子なりとの自覚が感じえらる。

読者諸君よ、誠に／＼に御勧め申します。君の奥底に伏する靈性が何とか機会を得て覺醒して活んとして蠕めいてをるではないか。然るをあなたが唯肉の我見と我慢などの為めに欺かれて、闇黒の中に押込られてをって、光明赫々として開裂しきれんのは実に可惜ではないか。我は人の子たると共に大ミオヤの子であるといふ自覚の光を以て人の子たる自己の本能を醇化し、宇宙広大なる中に立つて大ミオヤの子なりと叫び給へ。

若し一りの大ミオヤの御子との自覚できれば、一切の人類は悉く眞の同胞なりとの信仰が立ちます。

只一国民のみに限らず、一切の人類は悉く一の大ミオヤの御子なればすべては同胞である。人の子としての我は兄弟三人か五人。若し我は大ミオヤの御子なりとの自覚の下には、四海兄弟のみならず一切人類は全く仏の血の通ふ同胞にて、相互に仏心を以て相向ひ相愛し合ふことが出来る。

眞に愛する我らが同胞よ、疾く君の奥底に潜める靈性の覺醒して、我大ミオヤよ、我らが靈き同胞

衆よと、心の底から此声の発する日の一日も疾く来らんことを祈ります。

二四〇

光 明

ミオヤの光明とは如何なる相すがたにてまた何なる働きをもつて居るものぞとの間に対して、光明は仏教にて色光しきくわう、心光の二種に分てあります。大ミオヤには両方の光明有り。色光とは即ち太陽の光の如く肉眼にて見へる光にて、心光とは心理を照らす光なのである。

両面に亘つてをるけれども、今正しく私共が被むる処の如来の光明は精神の方面に受る処なれば、ミオヤの光明には悉しくは十二通りに名を命じ其光明の徳が十二通り明かに分て最も確實に私共の精神を照す光明在ますけれども、今は略してミオヤの光明を太陽の光に比較して我らが心を照らす光明の真理を説明します。太陽に光熱化の三線に比例して、如来に智慧と慈悲と威神との三光あり。ミオヤの智慧光は太陽の光線に比すべく、日出づれば世間が普く明るくなるは光線の力に依る、山河大地一切の植物等が歴然として現はる。ミオヤの智慧光は人の精神の知力を照らす処の光明なれば、人々

信仰に入て如来の光、智慧光の下に入れば、たとひ迷ひの凡夫とは申しながらも、道理に明るく、愚痴が出ず、物に明らめがつき、また因果の理を信知し、また如来の实在を信じ、今世後世の事に確信して疑はず、尙進んでは仏知見を開きて如来の一切の真理をも信じて疑はざるに至る。

次に太陽の熱線に比すべきは如来の慈悲である。慈悲と云ふものは心の最も暖温なるものにて、他の苦悶にあたるに同情し他人の苦を抜き樂を与へんとの同情である。世に慈悲も同情もなき人の心を冷酷と云ふ。然るに世にミオヤの慈悲ほど一切の人類に対して暖かなるものはない。私共一切衆生の為に無限の同情を以て苦を抜き樂を与へるのは即ちミオヤの慈悲である。されば春和の暖温なる氣候を被むれば桃李の花咲く如く、如来の慈悲の光明を被むれば信心の花開きて春風駘蕩えも言はれぬ樂しき心の花の開きたる生活のできるは、如来の熱線を被むつた故である。斯の如く人の精神に歓喜と妙樂と平和とのあたゝかなる慈悲を以て衆生の心に与へ給ふ故に如来の慈悲は太陽の熱線に比すのである。

ミオヤの威神は太陽の化学線に比す。太陽には化学線がありて化学作用を起して、例へば作物に肥料を施こすと、たとひ其肥料が土中に在るとも太陽の光の化学線にて肥料が分化して、土中にありて

夫を植物が食物として、夫で植物は益々培養せられて成長す。すべて日光に合ふて変化を起すは化学線
線
の
功
能
で
あ
る。

ミオヤの威神力で人の精神の意志の悪質煩惱でも光明に浴すれば変化す。恰も柿の果の渋をも日光
に乾燥する時は渋が甘干と成りて渋の深き程還つて甘味を作すが如く、人には何なる者にも煩惱の渋
のなきはない。(貪瞋嫉忌憎忌愚痴等のすべての弱点を煩惱と云ふ。)人は煩惱の爲めに自ら煩悶し憂
怖し苦惱す。而して他人にも忌嫌せらる。自ら苦しみ他に嫌はるゝ煩惱は何人も有てをる。されども
此煩惱あればこそミオヤの御慈悲が有がたく感じらるゝなり。されば決して我は煩惱深しと悲しむ
勿れ、自暴自棄する勿れ、其の煩惱の渋があればとて、如来の光明に依つて靈化せられて渋が變じて
甘乾しと爲るが如く、人の心は信仰に依つて一変する人格は一転する。諺に悪にも強きは善にも強き
とは宗教に入りたる人に於ても多く見るべきである。

或る男子は非常に疴癩持にて毎日二三回位はをこらぬ日はない、家族も是にて大に恐れて居つた。
然るに一度ミオヤの光明に触れて心機一転して半年を経れども未だ一回も悲うれを起したることなきを家
族の者は大に悦びて語り。また或婦人は非常にヒステリーの為に常に自ら悶えて悩むのみにあらで

主人も大に困じて居りしに、然るに一たび信仰に入て其性質一転して実に生れ更りし人となれり。ミ
オヤの光明に触れて人格を変化せしむること恰も太陽の化学線の如し。是で太陽の三線に比してミオ
ヤの光明の徳を明せり。

ミオヤの光明の存在につきては、実には理論よりは、人々自ら一心に念仏して自ら光明に触るゝ時
は、冷暖自知、自ら実験の上に信ぜざるを得ざるに至るのである。

經に、其れ衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歆喜踴躍して善心生ず、と。

全くミオヤの光明は之に触るゝ者をして人格を一変せしむ。

諸君よ、ミオヤの光明は実に天地に充滿し、外に計りでなくあなたの身の中にも充塞して居る。あ
なたが至心に念仏する時は必らずあなたの精神中に活躍せん。

光明の要ある人

すべての人類は太陽の光が無くては叶はぬ生物である。太陽なくては活きることが叶はぬ。いかに

眼が有ても太陽なくては物を視ることができぬ。夫と同じく我ら心霊に活きんと欲するならば是非ともミオヤの光明に由らなくてはならぬ者である。我らは現に闇黒である。何れより人に生れ来り、死して何に趣向するのか自ら明かに分からぬ。闇から闇に迷ふ凡夫である。ミオヤの光を仰ぎて初めて我らは光明の生活に入ることが出来る。

光明にふれよ

我等すべての活とし活ける者の一の大ミオヤ在ります。真のミオヤの聖意を私はすべての同胞の衆に御知らせ申したい。世の中に親なき子程みじめ惨な物はない。私共の此形体が生々して人並の身と成つて今日の開けたる世に処することできるのも、此形に就かば全く親の恵であります。其れの如くに私共の心の中心に在る心霊の大ミオヤは如来さまであります。されば釈尊は仏は是世を救ひ給ふ慈悲の父なりと念へと仰せなされた。私共は心霊を救ひ給ふ慈悲の父を離れては清き人と為ることはできません。私共が只此肉体にのみ活きて靈に活きることであれば狡猾な動物に過ぎませぬ。

如來の慈悲の乳を飲んで信仰に生きて見給へよ。眞実に心寛く体胖かに限りなき有難さと平和との日暮しができます。

世の人々は是程確かなミオヤの實在を自ら信ずる心の起らぬのは何故であらう。大ミオヤの恩寵の光は眼には見へぬけれども自己の靈性即ち信仰心さへできれば疑がふことができぬ。然らばいかにせば大ミオヤを信ずるやうに成られませうとならば、そこを私は眞から貴下に御聞せ申たいのです。どなたでも如來の實在を始めは只道理の上で計り聞て而して眞実に信仰の實が得らるゝと思ひますが、實は夫は大なる誤であります。

清き情操

一大事の安心につきては先第一に宇宙に唯一のミオヤの外に全幅を獻げて壽命信賴すべき御方は無きことを決心す。實に唯一の大ミオヤの外に我を接受して諸仏同体の仏位と爲し給はる御方は在まされぬ。

安心と云ふ信仰の決心が大事です。

あなたには此安心の情操が立ちますか。

如来よアナタの外に私を授受して御救済下さる御方は決して在まさぬ、故に私は生命を献げてアナタに帰命信頼申上ます。已にアナタに献げた命のことなれば縦令生命にかゝはる事情が起らうとも決して他の神や仏に祈誓する様な事はいたしません。

アナタの外に私の命を献ぐる御方は在りません。アナタの外に私の魂を献ぐる方は在りませぬ。アナタの外に胸の底を明して御頼申す御方は在りませぬと云ふいかなる事情の為にも決して動かぬ信の情操こそ、実に清き心なり。

永遠に活ける心霊は已に如来と結婚したのである。貞婦両夫に見えず、いかなる事情の下にもいかなる誘惑にも決して此靈的貞操を破損する事はない。また宇宙唯一の君を措きて他に意をよせる要はない。

或深窓の下に育ちし窈窕たる淑女があつた。安心の堅固なる信仰の貞操実に其操の清きこと比ぶるものなし。重患に罹つて医薬悉く尽せども効なく已に危篤に瀕す。時に法華の験者あり。之を聞いて

大に悦び、即ち往て其の父母に勸むるに娘の為に法華を信ぜよ忽ちに平癒すべしと。父母大に悦び之を女に告ぐ。女曰くあゝ我父母よ、是の如きの大事に臨んで今尙惑ひ給ふか。若し我如来の慈悲の御手を離れて法華に帰せば神識永く闇黒に墮せん。我生命は即ち如来の有たり。此土に在るも浄土に生るゝも如来の聖意による。若し法華を信じて天死てんじなきやを識らんと欲せば、法華宗の墓地に早世天死なきや否やを検し給へ。心霊を救ふ妙法を唯糊口の糧と為す。憎しと云ふよりは寧ろ憐むべき徒なり。即ち今幸にして如来に自己をさゝぐ。

オ、如来我を試み給ふか。アナタを措きて私何をか頼たのまん。私は益アナタを慕ふ。私は此土に在るも浄土に在るも永遠不死の生命なれば、此外に生命を云々する信心の要あるをしらず。ア、如来よ、慈悲のミオヤよ、アナタは法華僧を使はして私を試み給ふ。我が金剛の信心は決して法華僧の瓦を以て割ることは出来ぬと。

ア、清き操よ、此操こそ永遠に如来と離れざる結婚なり。

靈は已に如来と結婚式を挙げた。アナタと永遠に離れることのなき仲と為つた。此れに就いて思當るのは、タゴールの闇室の王の説に、私は王妃と為つて已に久しいけれども、未だ一度も配偶者たる

王の姿を親しく見たことはない。王様は全体美しい御方か、醜い御方か。どうも親面した事がないから自から分らないと。今私も昔はタゴールのと同じ様な経歴をたどつた経験がある。如来と割なき仲と為つては居るものゝ、親しく慈悲の面に接せざりし程は、朦朧と雲井はるかに憧憬るゝものゝ、その間にまた雲のかかるありて何時かこの雲を去りてさやけき月を見ま欲しさ。

昔慧心院僧都そんづの実験より現された雲中の弥陀の聖影瞻仰するにも、僧都の親観せしその如くに我もまた面見の日のあれかしと逢坂あふざの関のゆるされぬことを憾あはみし、宇宙に充滿する程のアナタの無限に広き聖胸の程を、淺ましき我身の悲しさ折々は雲井遙かにアナタの嘆息をして、聖者善導または聖者源信等の賢士なればこそ、月下らず水上らずして感應道交して寝る夜の床にも靈界の美人は通ひなされて離れぬる隙はなしと物されしよ。私ごときを卑みて聖意をかけまさぬかや情なや。かゝる片おもひ何ぞ我をば嫌ひ忌み給ふぞと、己が業障の深重なるを忘れ、還つてアナタをお憾み申したることもありき。

念佛三昧のこゝろの風

世の同胞衆よ。念仏三昧の行は三世の諸仏も悉くこの妙行に依つて正覺を成じなされたほどの最も尊い行法であります。此尊き妙行を修する時の神の置所を能く心得てお勤めなさるようにお勧め申します。

何事でも其妙所に達せんとするには先づ神の入れ方が肝心であります真の神の投込ざる念仏では心靈に活かることが出来ませぬ。

然らばいかにせば念仏に神を入れることができるであろうとお問ひなさるのでしよう。今愚納は念仏三昧の神の入れ方について話さうと思つてあります。

南無と言ふことは自己の全心全幅を阿弥陀仏に投歸没入してしまふことであります。然らばどう云ふ風に投げ込んでしまふのであろう。阿弥陀仏のまします所さへどの方にましますかはしかと分りもせぬものを、その如来の中にいかにして自己の神を投げ込めましようと思ふでしようが、なるほど初

めは如来はどこにましますか、しかと分らぬ如来の中に投げ込みやうは無いと思ふのは何人も然か思ふのでありませう。けれども如来は絶対的に尊とく在まして何の処にも在まさざることなき靈体なれば、唯無上の尊敬心を以て、アナタは今現に真正面に在ますものと信じて、靈名を呼び奉れば大ミオヤの大慈悲の靈胸に響きて慈悲の眸を注ぎて我を見そなはし給ふと思ひたまへ。

又大悲のミオヤをお慕ひ申して一心に念じ奉るべきのであります。夫でも初めはいかに聖名を呼びて念じ奉るも、其心の向ふは唯真闇にて如来の實在すとも思はれぬ程なれども、そは自己の業障が深重なるが故に業障の為に心神が闇いから心の向ふ所が闇いのであります。

けれども只一心に念仏して慈悲の御名を称へて至心不断なる時は、漸々に如来の慈光に育まれて心神が発達する故に神の入れ方が自づと分つて来る程に真面目に修しなされませ。

聖名を称ふる時の心の投込み方を法然上人は道詠にてお洩しなされた。「あみだ仏と心を西にうつせみのもぬけはてたる声ぞ涼しき」と。是があみだ仏と神を弥陀の光明中に投込みたるしやうにて、骸は蟬のもぬけ殻のやうに知らず／＼無我無想と為る。

さうなれば身は娑婆に在りながら神は弥陀の中に逍遙するやうになるのであります。

夫でも又思ひなざるのでせう。生れて以来まだ一度も瞻ながんだ事の無い如来をどうして想はれませうと。けれども確と見えねども、如来は実に在ますものであるから、唯仏陀の教を信じて現に在ますことを信じて念仏し給へ。一心に念ずる真正面に在ます如来は、あなたの念ずる心を一々に受けなされて在ます事があなたの心に響いて来る程に。

然しながら口に阿弥陀仏と云ひながら心は自己の胸中に在りて種々の雑念や様々の妄想に駆られて神が其中に紛らされてしまふて、口ばかりは御名であるが神は如来と一つに為つてをらぬと、それは真の念仏三昧でありませぬ。

念仏三昧の心は正に如来の光明中に風のまにまに風の如くに飛び騰たかるべきであります。

か様な話がある。英国のロンドンに或会社員の中に紛擾おとろが起つた時に或名士の信仰談にて衆多の社員社員の紛擾が解けたとのことである。其大意はかうである。天に在ます神は肉眼では見へぬ。其眼に視へぬ神の実に在ますや否やをいかにして分るかと諸君は疑ふのでありませう。然し眼に視へぬ神なれども至誠心に祈る時は、其心が確りと神様に貫徹して神意に触る故に其が祈る人の心に確りと神の御答が感じられます。至誠心なき祈は神様の聖旨に貫徹せぬ故に響がありません。今喩を以て語らば諸君

の御存知の如く此ロンドンは非常な濃厚な瓦斯気が折々かゝると夫にまた煙突の煙の甚しいので少しも天が見へませぬ。夫にも拘らず季節になれば風を揚て楽しんで居るものが沢山あります。煙や瓦斯気の為に風は見えぬけれども今日は風が能く揚つたと云つて悦んでをるではありませんか。風が騰つたか落ちたか見えぬのに何にして善く騰つてをることが判ると尋ねるならば答に曰ふのでせう。君よ、風は見えねども善く騰つた時は其緒に確かと答がある。若し風が墜落して了へば緒に答がない。との譬にて、至誠の祈は神に徹通して神の容るゝ処となるとの理を説いて衆人の紛擾を解いたとのことであります。

今念仏心も夫れと同じく、至誠心の念仏は一心に神の風が高く弥比の中に騰るので、称名の風のまに／＼空高く騰る。大念は大仏に小念は小仏に一心の全部を悉く弥陀の中に没入して風緒のあらん限りを尽して能く騰る時は、胸の箆の中に残るべき余緒がない。一心不乱に弥陀に没頭して了つ時の心の緒は夫を曳て見ても堅く一杯に昂つてをる。

諸彦よ、一心に念仏する時神の緒の有らん限りを弥陀の中に投入して了へば我胸中は妄想雑念の緒がなくなつて自分にもぬけ殻と為つて、神はみ空高く弥陀の中に騰つて居ります。其時は無我の状態

となりす。念仏三昧のナムアマミダ仏の風に随つて神の風が力一杯に騰つた心の状態を聖善導は「神を騰て踊躍して西方に入る」と讃してあります如くに、三昧中に歓喜踊躍して神は浄土に逍遙する相となるのであります。

全く能く念仏三昧を修した方ならば其時の神の在る処が能く判ります。業障の瓦斯や煩惱障の煙にて自己の神が弥陀の中に合致した事は視えねども深く三昧に入て神が弥陀に合したる時は、胸に何とも言はれぬ靈感の答がある。若し神が弥陀の中に騰らずして地に落ちたならば、折角の念仏中に只娑婆の雑念の為に紛はされて、貴重な時間と精力とを空しく費してしまふのは実に遺憾な次第ではありませぬか。神の風が能く騰らず胸の箴の中に緒の残りある故に種々の心緒が現はれて様々の妄念雑念と為るのであります。心の在らん限り一杯に騰つて心の緒が残りあらずば妄想雑念は自づから薄らいで来る。而して神の眼も漸々に開けて広い／＼大光明中即ち如来の中に在るやうになります。

諸君よ、念仏する時は神を一直線に高く／＼み天さやかなる弥陀の中に投込んでしまふことを能く修習し給へ。称名の風に神の風は歓喜踊躍しながら飛び騰りて弥陀の中に入神してしまふ時は、心の箴の中に心の緒を残さず妄念の跡を払つて、三昧に入る時は身はこゝに在りながら神は浄土の人とな

るのであります。

いや高く心の風はあがるなり御名よぶ声の風のまに／＼
月を見て月に心のすむときは月こそおのが姿なるらめ

辨栄聖者
光明大系

無礙光

終

目次

無礙光前篇

教友にまで申す.....	七
人生の帰趣.....	一三
安心.....	一八
所 歸.....	一九
自己は無智無力唯罪惡のみと知る.....	二〇
歸命すべき独尊を宗教意識に安置す.....	二一
本 尊.....	二二

心常に本尊を安置して……………	二四
所 求……………	二六
去 行……………	二八
慈悲の御親……………	三〇
威神光明最尊第一……………	三七
如来性世界性衆生性……………	三九
靈に活きる念仏……………	四八
念仏三昧に明鏡を磨せよ……………	五〇
心 本 尊……………	五一
恭敬と愛慕……………	五二
光は心靈を愛育し給ふ力……………	五三
念 仏……………	五四
火と炭との喩……………	五九

如何にせば慈悲の火が燃えつくぞ	六一
光明の増上縁	六三
如来は大智慧態にして又妙色相好身	六五
ミオヤの聖意	六七
光明の靈化	六九
靈性の解化	七〇
婦命	七一
念	七五
動搖せざる安心	七六
光明獲得の念仏三昧	八一
三昧に入れ	八三
三昧の練習	八五
自己の人格を無視する勿れ	八六

南無の二義（救我と度我）……………八九

本 篇

無礙光……………	一一〇
如来の三徳……………	一一一
神聖……………	一一一
正義……………	一一六
恩寵……………	一一九
仏陀の三徳……………	一二四
神聖正義恩寵……………	一二四
道徳の本源……………	一二七
恩寵の体現……………	一三〇
無礙光は解脱の徳……………	一三二

宇宙 大道	一三三
世界性と人性とは自ら解脱する能はず	一三四
無礙光によりて解脱	一三七
客觀的正義（社会制度及び選択本願力）	一三八
自然界に現はるゝ選択正義	一三九
世界に行はるゝ選択本願の正義	一四〇
現世界は方便土	一四二
神聖は道德の一大原則	一四三
形式と目的	一四五
自律と他律	一四六
主觀的正義（本務の形而上根底）	一四八
恩 寵	一五一
恩寵に方便と目的の二方面	一五二

終局目的としての恩寵……………	一五四
衆生はいかにして解脱を得べきぞ……………	一五五
恩寵の三種（三縁慈）……………	一五六
無縁慈……………	一五六
法縁慈……………	一五八
衆生縁慈……………	一六〇
三徳の連絡……………	一六一
無礙光は道徳的光明……………	一六四
無礙光は解脱の徳……………	一六五
無上菩提（無礙光）……………	一六六
無礙光に消極と積極……………	一六八
神聖同化の勢力……………	一六八
無上菩提の性能……………	一六九

婦趣せしむる性能	一七二
無上權威の神聖態	一七四
内面的正義	一七五
選択本願力	一七八
正知見と正義	一八〇
法界等流の恩寵	一八四
法藏菩薩の大願	一八七
本願力即ち神的エネルギー	一八八
光明の体相	一九二
三徳と菩提心	一九六
靈徳不思議の力	一九八
恩寵 発得	二〇〇
恩寵発得の二縁	二〇五

現在我と理想我	二〇九
歸命と融合	二一〇
入我我入	二一〇
宇宙の本体	二二二
大智慧態にして妙色相好身	二二三
妙法	二二五
四智の光	二二六
三徳の光	二二七
後 篇	
安心と開示	二二一
人格的の本尊	二二三
宗 教 心	二二五

彌音の瓔珞	二二七
法喜禪悦	二二八
ミ オ ヤ	二三一
仏子の自覚	二三六
光 明	二四〇
光明の要ある人	二四三
光明にふれよ	二四四
清き情操	二四五
念仏三昧のこころの扉	二四九
目 次	二五五